

一念三千の現代的解釈

三 輪 是 法

はじめに

天台大師智顛（五三八～五九七）が『摩訶止観』で説く「一念三千」は、周知の通り、不可思議なる対象として人間の心を表した言葉で、三千という数字は法華經の十如是（現象界を形成する構成要因と原理）と地獄界から仏界までの十界、そして五蘊（陰）世間・衆生世間・国土世間の三種世間の乗数である。換言すると、我々の心は本来具有している聖者を含めた十種の善悪の人格的要因（十界）と現象界（十如是）、さらに環境的外部要因を含めた存在の差異性（三種世間）の関係として成り立っているといえ、心には「他者」が存在しているということがいえる。そこで本稿では、人間の精神（実体視される心ではなく、関係性の中から誘発する精神）に焦点を当てた一念三千という理論を、精神分析が提唱する二つの視点、自理論と主理論に基づいて考察を加え、仏教の人間観の一端について、すなわち『摩訶止観』と精神分析が示す心と他者との関係について

考察を試みようとするものである。

「心」に関する研究については、心理学や精神医学が専門分野として牽引している。それは「心」を研究対象とすることで、主に病や社会問題などに対処する方法を明らかにしていく。ただし、「心」の研究を専門とする心理学や精神医学の分野でも、仏教と同様に複数の学派や派生した分野が存在し、現在では、第三世代の心理療法として、仏教瞑想に始まるマインドフルネスが取り入れられ、「マインドフルネス低減法」や「マインドフルネス認知療法」というように、一部の新しい療法に仏道修行や仏教思想が援用されている。

仏教でも、瞑想法の科学的説明が進められており、脳科学や心理学と連携する研究が確認できる¹⁾。一部の研究者の間では「仏教心理学」という研究分野が立ち上がって学会も設立され、心に主眼を置く、「仏教に基づく心理学」の定着へと研究が進められている。また、アジア思想としての仏教思想を援用して、西欧の哲学者や社会学者が「心」の究明を試みている²⁾。つまり、仏教の修行法である瞑

想という実践に基づき、「心」を科学的に解明しようとする方法がとられている一方、哲学、社会学などの人文科学の研究分野でも「心」を解明する研究がそれぞれ進められている。ただし、異分野における「心」に関する研究を統合する、共通したテーマが設定できていないように思える。

このような現状を鑑み、本研究は仏教学という研究分野から、「心」とは何か、という問題を提起し、哲学・社会学・文学・生命科学という分野と応答することで、「心」を複眼的に分析しようとするものである。その起点として、『摩訶止観』で説明された心相である「一念三千」に着目し、現代的意味について解釈を試みたい。

一、仏教と心の研究

心の学問として心理学が日本に入ってきたのは明治期であり、西周（一八二九～一八九七）がオランダ留学後、私塾にて心理学を講義している。西欧から輸入された心理学を仏教と関係づけたのは、原坦山（一八一九～一八九二）ではないかと考えられる。原は曹洞宗の僧侶であり、出家以前に西洋医学を学んでいたため、仏教研究に実験実証の方法を取り入れ、「仏仙社」を創設して身心の調和を整える医方を提唱した人物である。一方で、東京帝国大学（現・東京大学）で初めて仏典講義を行ったことでも知られている。原の著書には『心性実験録』というものがあるが、すでに現代という脳科学

を取り入れたような記述があり、「惑病同源苦因一体⁵⁾」として捉えて、「仏教心理学、生理学、医学等」を研修することによって、病や苦悩の原因を根絶できると考えていたようである。⁶⁾

ところで、心の学問としての心理学の歴史は、アンリ・エランベルジェの著書に基づけば、すでに未開民族の呪術的医療やシャーマニズムにその起源を確認できるという。⁷⁾ エランベルジェが指摘する中に、アジアの事例も確認でき、「哲学的、宗教的な教説に立脚した精神修養技術⁸⁾」としてインドのヨガと仏教の禪があげられている。

仏教が「精神修養技術」と認識されているように、心理学は心に発生するなんらかのトラブルを治療する方法として出発し、現代の精神医療へと発展してきた。ただし、エランベルジェの総合的視点ではなく、著名な研究者に基づいて心の研究分野の名称をあげれば、フロイトに関しては精神分析、ユングは分析心理学、アドラーは個人心理学と、それぞれの研究分野が翻訳されており、すでに精神分析と心理学の両方の名称が使われていて、素人にとってその違いについて知ることは困難である。⁹⁾ そこで、精神分析と心理学についての差異を、精神医学を含めた片岡一竹氏の分類によって確認すると次のようになる。¹⁰⁾

A. 精神医学

↓ 雑多な「社会的不適合者」の中から「精神を病む人」が抽出され、ひとつのカテゴリーとして医学的な治療・診断の対象と

する

資格・国家資格

目的…患者の治療⇨投薬治療⇨症状を消失させる

B. 臨床心理学

↓心理学とは…人間の心のメカニズムを知るための学問全般
(大きい範疇、大学の学問) ⇨教育心理学、社会心理学、発達心理学など

↓心理的なトラブルや異常を扱い、臨床実践を行う

資格…民間資格

目的…クライアントの援助⇨カウンセリング⇨健康な心理状態に直す

C. 精神分析

↓前提…健常者はいない⇨すべての人は神経症者、精神病患者、
倒錯者(自閉症者)という「生き方の構造」に分類される

資格…精神分析を受ける

目的…自分自身が納得できる生き方へと踏み出せるようにする

⇨理想に苦しめられなくなる

精神医学と臨床心理学は「治療」行為を伴うものであると考えられ、「心理学」だけの場合は、臨床を含め、人間の心のメカニズムを知るための学問全般の総称ともいえ、教育学や社会学、経済学などの文化系の研究分野にも応用されて、他方、民間資格によってカウ

ンセリング行為という治療を行うこともできる。

ところが精神分析は、すべての人間の心は不健康であるという前提に立っており、それを踏まえてその人間に適する生き方へと導くというもので、倫理とも呼べるものである。つまり精神分析は、治療を伴う医療であるというよりは、哲学や宗教に近いのではないかという印象を受ける。そこで、仏教を精神分析や心理学に関係づける研究について一瞥してみたい。

二、精神分析や心理学から見る仏教

現代では、仏教と心理学、あるいは精神分析との関係について、すでに多くの著書や論文で取り上げられている。今手元にある著書に限ってあげれば次のようなものがある(出版年順)。

- ① 鈴木大拙／エリツヒ・フロム／リチャード・デ・マルティノー『禅と精神分析』(翻訳初版一九六〇年、東京創元社)
- ② 岸田秀／三枝充恵『仏教と精神分析』(一九九三年、青土社)
- ③ 河合隼雄『ユング心理学と仏教』(一九九五年、岩波書店)
- ④ 松戸行雄『現代に生きる仏法―自分を見つめるカウンセリングのために―』(一九九五年、みくに書房)
- ⑤ 小此木啓吾／北山修編『阿闍世コンプレックス』(二〇〇一年、創元社)
- ⑥ 安藤治『心理療法としての仏教』(二〇〇三年、法蔵館)

⑦マーク・エプスタイン『ブッダのサイコセラピー』（翻訳初版二〇〇九年、春秋社）

⑧岡野守也『仏教とアドラー心理学』（二〇一〇年、佼成出版社）

⑨永尾雄二郎／クリストファー・ハーディング／生田孝『仏教精神分析』『続・仏教精神分析』（二〇一六年・二〇一八年、いずれも金剛出版）

⑩藤能成編著『仏教と心理学の接点 浄土心理学の提唱』（二〇一六年、法蔵館）

ここに取り上げた研究著書はほんの一部だが、大半の研究は心理学者や精神医学者によって行われている臨床的事例を伴う研究である。他方、仏教学者、あるいは仏教者（宗教実践者）の立場から論じられている著書が松戸氏と藤氏の二書（宗教実践者として岡野氏の研究を含めれば三書）である。また着目されている仏教の内容としては、方法としての瞑想が主流であり、思想として禅と唯識によって主に心が説明されている。

この中で異彩を放っている研究が、松戸氏と永尾氏、藤氏の仏教側から心理学へアプローチを試みたものである。三氏に共通していることは、日本仏教の宗派に根ざした教学を基底に、精神分析や心理学の臨床を行っている点であろう。具体的には、松戸氏は日蓮教学、永尾氏と藤氏は親鸞教学である。

それぞれについて簡略に述べれば、松戸氏の場合は宗教的色彩が濃く、唯識と近い考え方で、三世にわたる業因に基づいてカウンセリングをするというものであり、親鸞教学においては、罪深い人間存在をそのまま諦めることで懊悩を解消するという臨床事例が述べられている。

詳細について述べることは稿を改めておこなうが、いずれにしても、仏教を精神分析や心理療法へ応用する事例は少なくなく、現在ではマインドフルネスとして仏教瞑想が実践されていることを知れば、仏教と心理学との親和性を認めることは容易であろう。ただし、そこにある心の描写については、それぞれの立場によって異なり、綿密に分析された唯識の学説に基づいて心理学や精神分析が描く心との共通性を見いだす研究、あるいは、禅の境地に正しい心のあり方を見いだすものなどが確認できる。そこで本稿では、止観という瞑想法に着目し、天台大師智顛が講じた『摩訶止観』に示される心の分析と、精神分析理論との共通性について考察を加えてみたい。

三、『摩訶止観』の一念三千論

一念三千は『摩訶止観』第七章「正修」で説かれるが、冒頭部分では、止観という方法について詳細が示されている。^①

①開^{ニハ}止^チ観^{カン}爲^ス十^ト。一陰^{ニハ}界入^{ニハ}。二煩^{ニハ}惱^{ニハ}。三病^{ニハ}患^{ニハ}。四業^{ニハ}相^{ニハ}。五魔^{ニハ}事^{ニハ}。六禪^{ニハ}定^{ニハ}。七諸^{ニハ}見^{ニハ}。八増^{ニハ}上^{ニハ}慢^{ニハ}。九二^{ニハ}乘^{ニハ}。十菩^{ニハ}薩^{ニハ}。（中略）

陰^ノ 在^レ 初^ル 者^ニ 二義^{アリ}。一 現^ニ 前^ニ。二 依^ル 經^ニ。

止観を開いて十となす。(中略) 陰が初めにあるは二義なり。一つには現前、二つには経による。

天台大師智顛は、止観という修行による対境を十項目あげている。最初にあげられている対境が陰入境界で、続けて煩惱境があげられる。陰入界とは「三科」ともいい、五陰・十二入・十八界のことで、五陰は個人としての存在そのものを顕し、十二入は感覚器官とその対象、十八界は感覚器官がその対象と接触して起こる認識・判断であり、人間存在そのものを表しているということが出来る。ただし、人間存在が実体をもつものではないということを読きたために、五陰・十二入・十八界という複数の要素の集まり(纏・関係)によって成り立っていることが示されている。

この陰入界が第一の観察対象としてあげられる理由は二つあり、一つが仏教において人間存在は必然的存在であるため、もう一つが必ず仏典に説かれていることだからだという。換言すると、陰入境界という人間存在は、仏教の主要テーマということになる。

② 又行人受^ル 身^ヲ 誰^ノ 不^ニ 陰^ナ 入^一。重擔現前。是故初観。

また、行人が身を受ければ誰か陰・入にあらざらん、重担が現前す、このゆえに初めに観ずるなり。

さらに、この世界で身体をもつ者はおならず陰入をもつ以上、重荷としての身体を観察しなければならないとしている。

③ 夫^レ 五陰与^ニ 四^大 合^ス。若^シ 不^ニ 照^ハ 察^セ 不^レ 覺^ニ 紛^ト 馳^ト。如^シ 閉^レ 舟^ヲ 順^レ 水^ニ。寧^シ 知^ニ 奔^進。若^シ 其^レ 迴^リ 泝^ハ 始^ニ 覺^ニ 馳^流。既^ニ 觀^ニ 陰^ヲ 果^ニ 則^チ 動^ニ 煩^悩 因^一。故^ニ 次^ニ 五^陰 而^ニ 論^ス 四^分 也^一。

それ五陰と四大と号す。もし照察せずんば、紛馳を覺せず。舟を閉じて水に順ずるがごとく、なんぞ奔進を知らんや。もしそれ廻り泝れば、始めて馳流を覺る。すでに陰の果を觀すればすなわち煩惱の因を動かすがゆえに、五陰に次いで四分(三毒が別々に起こることを三分、同時に起こることを一分とする)を論ずるなり。

対境である煩惱境について、智顛は舟と川の流りに譬えて解説し、舟に五陰を觀察することで、川の流れに煩惱の複雑な動きを知ることができるといふ。それ以降の項目については詳述を避けるが、仏道修行において陰入界を觀察すれば、自ずと煩惱境以下九つの対象を觀察しなければならなくなると説明されている。

④ 第一^ニ 觀^ニ 陰^入 界^境 者^ヲ。謂^フ 五^陰 十^二 入^{十八} 界^一 也。陰^者 陰^蓋 善^法。此^レ 就^テ 因^得 名^ヲ。又^レ 陰^ハ 積^聚 生^死 重^沓。此^レ 就^テ 果^得 名^ヲ。亦^名 輪^門。界^名 界^別。亦^名 性^分。(中略) 又^分 別^九 種^一。

一期色心名果報五陰。(中略) 如是種種。源從心出。(中略) 若依華嚴云。心如工画師。画種種五陰。界内界外一切世間。莫不從心造。

陰は善法を陰蓋す。これは因について名を得るなり。また陰は

これ積聚なり。生死が重沓す。これは果について名を得るなり。入は渉入なり。また輪門と名づく。界は界別に名づけ、また性分に名づく。（中略）また、分別するに九種あり。（中略）このごとき種種は、源は心より生ず。（中略）界内・界外は一切世間の中に心より造らざるはなし。

次に、その観察方法として、十種の方法である「十乗観法」が説かれる。智顛は、そこでも陰入界について解説している。「陰」とは善を覆い隠し、結果として生死の苦しみが積み重なるという意味であり、「入」とは外と関わりを持つ入り口であり、「界」とは認識が異なることを示すという。さらに、五陰を分別して九種をあげて、そのような五陰の変化は心から生ずるとし、界内・界外（欲界・色界・無色界の三界の内外）のすべての現象は心によつて作られるとしている。

⑤然界内外一切陰入皆由心起。仏告比丘。一法撰一切法。所謂心是。論云。一切世間但有名与色。若欲如实现觀。但當觀二名色。心是惑本。其義如是。（中略）置三色等四陰。但觀二識陰。識陰者心是也。

しかるに、界の内外の一切の陰入はみな心に由りて起るなり。（中略）『論』にいわく、「一切の世間の中には、ただ名と色とのみあり、もし実のごとく観ぜんと欲せば、ただまさに名と色を観ずべし」と。心がこれ惑の本なること、その義はこのごとし。

（中略）色等の四陰を置いて、ただ識陰を観ずべし。識陰とは心これなり。

④と同様に、三界内外の事象は心によつて起るとした上で、『増一阿含経』と『大智度論』を引用する。いずれの引用も、結論として、この世界は五陰しかなく、心が迷いの原因であるから、五陰の中でも、まず識陰である心を観察する必要性が示される。

続けて「心を観ずるに十の法門を具す」として、観不思議境・起慈悲心・巧安止観・破法徧・識通塞・修道品・対治助開・知次位・能安忍・無法愛の十乗観法があきらかにされ、その第一として説示されるのが観不思議境である。

⑥一觀心是不思議境者。此境難レ説。先明不思議境。令不思議境界易レ顯。（中略）不可思議境者。如三華嚴云。心如工画師造種種五陰。一切世間中。莫不從心造。種種五陰者。如前十法界五陰也。法界者三義。十数是能依。法界是所依。能所合称。故言十法界。又此十法各各因各各果。不三混濫。故言十法界。又此十法一当体。皆是法界。故言十法界云云。

心はこれ不可思議の境なりと感ずるは、この境は説くこと難し。先づ思議の境を明かし、不可思議の境をして顯わし易からしむ。（中略）法界には三つの義あり。十の数はこれ能依、法界はこれ所依にして、能・所を合わせて称するがゆえに十の法界という。

また、この十法はおのおの因、おのおの果にしてあい混濫せざるが故に十法の界という。また、この十法は一一の当体がみなこれ法界なるが故に十法界という、云々。

観察対象としてあげられる最初の名目が観不思議境である。心は思議を超えた対象であり、説明しにくいとして、まず思議可能な対象として心から生ずる一切法として十界の因果を明示していく。妙樂大師湛然（七一―七八二）の注釈に基づけば、法華経以外(19)の大乘大乘いずれも十界の因果を心生というので思議、実はこの十界が心に具しているから不可思議だということである。

⑦十法界通稱ニ陰入界^ト。其^レ実^ニ不同^之。三途^ハ是有漏^ノ惡^ノ陰入^ト。三善^ハ是有漏^ノ善^ノ陰入^ト。二乘^ハは無漏^ノ陰入^ト。菩薩^ハ是有漏^ノ亦^ハ無漏^ノ陰入^ト。仏^ハ是非有漏^ノ非無漏^ノ陰入^ト。（中略）以^テ十種^ノ陰界^ト不同^之故^ニ故名^ニ五陰^ノ世間^ト也^ト。(20)

十法界を通じて陰入界と称するも、その実は不同なり。三途はこれ有漏の惡の陰界入なり、三善はこれ有漏の善の陰界入なり、二乗はこれ無漏の陰界入なり、菩薩はこれ亦有漏亦無漏の陰界入なり、仏はこれ非有漏非無漏の陰界入なり。（中略）十種の陰界が異なるをもつてのゆえに、ゆえに五陰世間と名づけるなり。

⑧況^シ十界^ノ衆生^ト。寧^レ得^レ不^レ異^ヲ。故名^ニ衆生^ノ世間^ト也^ト。(21)
いわんや十界の衆生も、なんぞ異ならざることを得んや。ゆえ

に衆生世間と名づけるなり。

⑨土土不同^之。故名^ニ國土^ノ世間^ト也^ト。此^ノ三十種^ノ世間^ハ悉^ク從^テ心造^ス也^ト。(22)
土土は異なるがゆえに國土世間と名づけるなり。この三十種の世間はことごとく心より造る。

さらに、十界それぞれの五陰に言及する。では、十法界とはなにか。湛然の説明に基づく、「法界」とはあらゆる存在を空・仮・中の三諦でみることで、それを説明の便宜上、区別するのだという。(23)すなわち、智顛は法界には三種の意味があり、第一に空觀では、十という数字は能依、依るべきものである十の主体があることを示し、それぞれが依存する法界を躡した能所一体の十法界という意味、第二に仮觀では十界それぞれの因果があるということ、第三に中觀では十界がすべてそのまま法界であることを示す。(24)十という数字は違いを表す仮觀に基づき、それぞれの因果を持つが、実相があるのだからすべてが空であり、これが十法界ということになる。第二義に基づくと、それぞれの因果が混乱することなく、陰入界には十種の違い、地獄・餓鬼・畜生Ⅱ三途の惡、修羅・人・天Ⅱ三善の善、二乘、菩薩、仏の違いがあり、この異なつた五陰が集まつたものが五陰世間であり（引用文⑦）、五陰をひとまとめにして衆生と言つても、衆生の最上位が仏なのだから、そこにはやはり十種の違いがあり、異なる衆生の集まりを衆生世間という（引用文⑧）。そのように考えると、衆生の住まう國土にも十種あるわけで、よりどころとな

る国土の集まりを国土世間といい（引用文⑨）、合わせて三十種の異なりが心から生ずる。

⑩衆生世間既是假名。無三体分別。攬實法一假施設耳。所謂惡道衆生相性体力究竟等云云。（中略）国土世間亦具十種法。所謂惡国土相性体力等云云。

衆生世間は、すでにこれ仮名にして体の分別はなし、実法を攬つて仮りに施設するのみ。いわゆる惡道の衆生の相・性・体・力・究竟等なり。（中略）国土世間もまた十種の法を具す。いわゆる惡の国土の相・性・体・力等なり云云。

⑪夫一心具十法界。一法界又具十法界。一界具三十種世間。百法界即具三千種世間。此三千在一念心。若無心而已。介爾有心即具三千。（中略）若心一時含一切法者。此即是橫。縱亦不可。橫亦不可。祇心是一切法。一切法是心。故非縱非橫。非一非異玄妙深絕。非識所識。非言所言。所以稱為不可思議境。意在於此云云。

それ一心に十の法界を具す。一つの法界にまた十の法界を具すれば百の法界なり。一つの界に三十種の世間を具し、百の法界にすなわち三千種の世間を具す。この三千は一念の心にあり。もし心なくんばやみなん、介爾も心あればすなわち三千を具す。（中略）もし一心より一切の法を生ずれば、これはすなわちこれ縦なり、もし心が一時に一切の法を含めば、これすなわち横な

り、縦もまた不可なり、横もまた不可なり。ただ心がこれ一切の法、一切の法がこれ心なるのみ。

十種ある五陰世間には、十種の形而上的要素がある。それが十如である。智顛は相・性・体・力・作・因・縁・果・報それぞれについて説明を加え、九つの要素が「本末究竟等」であることを天台の実相論である空・假・中の三諦に基づいて説明する。

心に十如是が具足しているということについて、智顛は相・性・体・力・作・因・縁・果・報それぞれについて説明し、三途・三善・二乘・仏菩薩の十界の十如是の違いを具体的に示していく。すなわち、惡道の衆生には惡の十如があり、惡の国土にも惡の十如があるということである（引用文⑩）。

このような詳細な説明がなされた後、心の様相が総括して説かれる。これが「一念三千」である。説明してきた要素の数をすべて掛け合わせ、三千という数字を導き出して「この三千は一念の心であり。もし心なくんばやみなん、介爾にも心あればすなわち三千を具す」といい、一心からすべての存在が生ずるのでもなく（豎ではない）、すべての存在が一心に包括されているのでもない（横でもない）としている。すなわち、ここはそのまゝ一切法であり、すべての存在は心であるということになる（引用文⑪）。

以上が、『摩訶止観』で説明される、不可思議境とされた我々の心である。この世界で、心でないところはないということになり、世

界の現象を知れば心を知ることになる。つまり、「私の心」なるものは、この世界として存在しているということで、この世界も実体をもち、私の心が生み出したイメージのようなものであるということになる。さらに換言すれば、「心は他者であり、他者は心である」といえるであろう。

次に、この一念三千の心観について、精神分析の理論をかりて解釈を試みたい。

2. 一念三千と精神分析

まず、精神分析の主体と自我について確認してみたい。この考察においては、ジャック・ラカンの精神分析理論に基づく定義である。²⁷⁾

先述したとおり、精神分析では、人間存在は誰もが病であるという前提に立っている。その理由は、すでに主体を失っているからである。したがって、「分析主体」とは精神分析家ではなく、「悩める者」自身である。詳述すれば、精神分析は病氣の人を健康にしたり、歪んだ人格を矯正したりすることではなく、悩み苦しむ人が自らの問題を主体的に解決していく営みである。ここに仏教と共通した考え方が認められる。つまり、仏教で説かれる主体とは、菩提心を持ち、仏を目指し修行する者のことで、『摩訶止観』でいえば、その主体が正修行に入り、陰入界を観察対象として観不思議境という観法修行を行った結果、一念三千の境地に至り、悟りへの歩みを一歩進

めるということになるであろう。いま安易に「主体」という言葉を使用しているが、そもそも人間という主体、すなわち、精神分析という「主体」とはどのような状況、いうのであるうか。

主体とは想像（ラカンは想像界と名づける）でしかないという。この想像としての主体は鏡よって定着する。この主体を形成する段階が「鏡像段階」である。

鏡像段階論は、「わたし」の機能を形成するものとしての鏡像段階」というタイトルで学術大会において解説された。

観察下における猿のように、鏡像が無意味なものであることを一度経験してしまえばそれでおしまいということはありません。

この行為は、事実、一連の行動においてすぐに子供の精神に意図的な局面をもたらします。子どもははしゃぎながら、映し出された周囲と自分の鏡像を積極的に受け入れ、関係づける行動にです。そして、それは仮想的結合と、より現実的なもの―それは自分自身の体や人格、さらには自分の周囲を取り巻く対象物―とを関係づけます。²⁸⁾

ラカンは生後六ヶ月から一八ヶ月の幼児が自我に目覚めることを説明する。まず、幼児は鏡に映った鏡像として、自らの身体と周りの環境との関係をゲシュタルト的（全体構造）にイメージとして把握する。

「鏡像段階」は、精神分析がこの用語にあたる様々な意味の

なかで同一化 (une identification) として理解するだけで十分です。つまり、鏡像を受け入れる際に、主体において生み出される変換を知ること―鏡像段階であらかじめ決められている結果は、精神分析論におけるイマージという古い用語によって十分に示されています。⁽²⁰⁾

次いで「同一化」が直ちに訪れる。まだ口のきけない幼児が鏡像を自分として引き受け、その後成長する「わたし」は、鏡像という他者との同一化の中で自分を客観視し、本来の自分（ラカンはこの「大文字の他者」と名づける）ではないことを知らずに自我として確立していく。自我は想像の産物でしかなく、主体は鏡像を受け入れたときから、すでに他者となる。ここにいう「イマージ」とはイマージュのラテン語で、C. G. ユングが概念化した言葉であり、母親・父親・兄弟（姉妹）としている。つまり、幼児期に強い愛情関係にあった人物を表すということで、普通は異性の親の姿からつくられ、成長してから行動やその決定に強い影響力を持つとされている。⁽²¹⁾

こうして人間は「主体」を失い、真実の姿ではない想像の「自我」によって自己を確立する。人間は自分を自分の眼で認識することはできない。つまり、鏡像というイマージ（映像全般）、すなわち想像として認識するほかはない。したがって、ラカンは自我を分析することを批判している。

ある人たちは、分析の操作を「今ここ」に限るべきだと思っているし、それは、分析者が「今ここ」に見いだす想像的志向を、その志向が明らかにする象徴的關係から引き離さなければ実際には有用なことであろう。「今ここ」では、主体の自我―これは《わたし》、つまり一人称のかたちでは、主体によって再び受け入れられることのないもの―に関しては、何ひとつ読み取れないはずである。⁽²²⁾

人間は想像によって仮の主体を形成する。それが自我である。これを換言すると、人間には核となる本質、すなわち本来の存在なる主体を失っているということで、一人称ではない他者ということになる。精神分析家である向井雅明氏は次のように述べている。

そもそも人間には内的な自我に相当するものはなく、その代わりにあるのは自らの身体の寸断されたイマージでしかない。外部の鏡のなかのイマージは自分の身体を全体的な統一したものとして見せてくれ、子供はそれを自分の自我の起源として取り入れるのだ（鏡像段階論）。（中略）心理学的には内部の自我が外部に自分のイマージを認めるのに対して、ラカンによれば、外部のイマージが自我として私をとらえる。⁽²³⁾

「自我」という自分の像は、外部である他者との関係を通して作り上げられた虚構的なものであり、それは我々の本質ではないということになる。通常仏教では、自我は自立した存在として認められ、

この自我に執着することを克服することを重視するが、この自我ですらすらに実体をもたないものだという精神分析の理論は、そこから人間の生が始まるという原因として位置づける考え方であり、仏教の無我が縁起から導かれることから見れば、ベクトルの向きが異なるが、仏教が説く無我と同じ人間観を示すと考えられる。向井氏は次のように解説している。

(心理学化されたデカルトの自我は) 自律し、実体を持ち、統
一した意識的主体であり、自分自身の支配者だと考え、精神的
諸機能を統合する中枢機関である。簡単に言えば、脳内に住ま
い、身体をコントロールしている小人のようなものである。(中
略) それに対して、精神分析は意識の特権を否定し、実体をも
たない、分裂した主体というものを考えようとする(括弧内筆
者)。

こうして人間は、本来の姿(ラカンの言葉では対象)を自我に乗っ
取られて生を歩き始める。やがて仮想の主体は、代わりの象徴を得
ることで生滅するという。それが象徴的存在(ラカンは象徴界と名
づける)としての「記号(言語、ラカンの言葉ではシニフィアン)」
である。

象徴としての記号は、「母親の存在欠如 (le manque-à-être) に同一
化する方法」⁽³⁴⁾とされている。すでに人間は言語化された社会の中に
生まれてくる以上、幼児は想像界と象徴界に属しているが、まだ意

味を持たない音だけの言語を発生することによって、時系列に並べ
られる(通時的)言葉を積み重ね、同じ言語空間としての社会(共
時的)に積み上げられた言葉の世界を生きることになる。⁽³⁵⁾

ラカンはこのことについて「子供が言語活動において誕生する時
点」⁽³⁶⁾といい、「欲求が人間化される時点」⁽³⁷⁾と同じだという。本稿で
「欲求」「欲望」まで触れることはできないが、その発生原因と欲求
と欲望との差異を知るとは、仏教という「煩惱」について現代的
解釈を加える手がかかりになると考えられる。とにかく、こうして象
徴の世界に人間は支配されることになり、主体は消失しながら、言
語⇨シニフィアンの連鎖の中で無いものとして生き延びていく。こ
の無いものとしての主体が「無意識の主体」と呼ばれる。もう一度、
向井氏の文章を確認してみたい。

それに対して、精神分析は意識の特権を否定し、実体をもたな
い、分裂した主体というものを考えようとする。例えば精神分
析は、意識は自律した主体ではなく、その奥には無意識が潜ん
でおり、意識は氷山の一角でしかないと考えることによって、
主体を意識と無意識に分裂した構造として考える。⁽³⁸⁾

この説明によれば、意識的主体は存在せず、意識と無意識の関係
性において主体が現れるということになる。この主体を止観の立場
からいうと、心を観察する段階に現れると考えられる。すなわち、
主体とは「無意識の主体」であり、精神分析で言われているように、

存在するものというより一瞬生じるもので、止観でいえば具有している三千という不可思議なる要因といえるであろう。

ところで、「心は三千の他者である」という説明を受けたときに、私たちが普通に理解することは困難である。なぜならば、心を不可思議境と名づける段階、心が三千の他者であると覚知する段階は、仏教においてはすでに修行者の領域であり、言葉の域を超えた段階と考えられるからである。人間は言葉でものを考え、理解し、イメージを伴って認識している。『摩訶止観』で心が詳述されるのは、すでに言葉離れた境地に到った後、翻って理解させるために言葉によって説明された世界だと考えられ、不可思議なるものを可思議化しているに過ぎない。これは精神分析でいう、無意識の主体を言葉によって意識化しているということになるだろう。心に関するこの両者の説明は、実は同じことを言っているように考えられる。私たちの思議が及ばない心、意識化されない心を言語化したとき、心の姿を知ることができるということになるのではないだろうか。

小 結

精神分析では、主体と自我は同じではない。総称して自己という表現を使えば、すなわち自己は二つの側面をもつ（分裂している）ことになる。つまり、『摩訶止観』でいう観察対象となる陰入境界が他者によって形成された（寸断されたイメージとしての）「自我」、

観察結果として得られる心のあり方、一念三千が「無意識の主体」といえないだろうか。

ただし、精神分析が導く自由な人生の方向性に対して、仏教は仏陀という唯一の生き方（実は唯一ではないのかも知れない）を選択するという違いがあるが、精神分析が分析主体に特殊性を顕かに見ようとする以上、『摩訶止観』が示す一念三千という心の様相と決して異なるものではないと考えられる。

「無意識の主体」、意識と無意識の関係性に生ずる主体こそ一念三千という心だと考えられ、精神分析でいう主体は、意識されることで、抑圧され、やがて欲望が生まれるという過程へと移行していく。今後継続して、精神分析でいう欲望と、仏教でいう煩惱との関係について、必ずしも一致する内容を示すとは限らないが、考察を加えていきたい。

付記 本稿は令和4年度研究推進・地域連携センター支援費（第1種、異分野融合・連携の共同研究）採択に基づく。

注

(1) 現在、養輪顕量氏が代表を務める科研費研究（二〇二二～二〇二六）に「仏教学・心理学・脳科学の協同による止観の総合研究」がある。

(2) Francisco J. Varela, Evan Thompson and Eleanor Rosch, "The Embodied Mind : Cognitive Science and Human Experience," Massachusetts

- Institute of Technology, 1991. フランシスコ・ヴァレラ、エヴァン・トン
ブソンエレンア・ロッシュ「身体化された心 仏教思想からのエナクテイ
ブ・アプローチ」(工作舎、二〇〇一年)。
- (3) 佐藤達哉・溝口元編著『通史 日本の心理学』(北大路書房、一九九七
年)、一七～二四頁。
- (4) 吉川弘文館『国史大事典』に基づく。
- (5) 釈悟庵編輯・川口高風解説『原坦山和尚全集』(名著普及会、一九八八
年)、三二頁。
- (6) 右同書、三二頁。
- (7) Henri Frédéric Ellenberger, "The Discovery of the Unconscious - The
History and Evolution of Dynamic Psychiatry," Basic Books, 1970, p.40 -
41. アンリ・エレンベルガー『無意識の発見』上(木村敏・中井久夫監訳、
弘文堂、1980年)、四三頁下。
- (8) *ibid.* 右同書、四四頁上。
- (9) 実際、エランベルジェの著書のフランス語版のタイトルは「decouverte
de l'inconscient」[「無意識の発見」というタイトルであり、その内容につ
いても「力動精神医学史」という翻訳で統一されている。「力動精神医学」
の「力動」とは、精神現象の成立のメカニズム・意味を深層に求め、動的
に把握する方法によって分析するもので、フロイトに始まるということだ
ある。(平凡社『世界大百科事典』に基づく)
- (10) 片岡一竹『疾風怒濤精神分析入門』(誠心書房、二〇一七年)一四～二〇
頁
- (11) 原文の読み下しについては『天台大師全集』に基づき、出典に関しては
『大正新修大藏経』(以下、大正藏経と省略)の頁数をあげる。
- (12) 大正藏経第四六卷、四九頁b。
- (13) 右同。
- (14) 右同。

- (15) 右同書、四九頁c。「余九境^ノ境^ハ発^ス可^ク為^ル観^ヲ。不^レ発^セ何^レ所^レ観^ル。」
- (16) 右同書、五一頁c～五二頁a。
- (17) 右同書、五二頁a～b。
- (18) 右同書、五二頁b～c。
- (19) 右同書、『摩訶止観輔行伝弘決』、二九二頁c。「由^ル大小乘皆云^ニ心生^ト。
以^テ教^ヲ権^ニ、故^ニ不^レ云^ニ心^ノ具^ト。雖^ニ若^ク六^ノ若^ク十^ノ。皆^ニ属^ス思^ノ議^ト。」智顗は華嚴経の
「如上画師 画種種五陰」の偈文中、「画」を「造」と置き換えており、こ
れを受けて湛然は、「造とはすなわちこれ具なり」としていることから、華
嚴経の教説に基づいて権実を述べていると考えられる。
- (20) 右同書、五二頁b～c。
- (21) 右同書、五二頁c～五三頁a。
- (22) 右同書、五三頁a。
- (23) 右同書、『摩訶止観輔行伝弘決』、二九三頁a。「一切諸法。皆以^テ三諦^ヲ而
爲^ス界^ト。爲^ス明^ニ三諦^ニ、故^ニ須^ク加^テ十^ノ以^テ顯^ス相^ノ状^ト。故^ニ三^ノ字^ヲ離^シ合^シ不^レ同^ト。
備^ス成^ス三^ノ諦^ト。」
- (24) 右同書、五一頁c。「法界者^ト三義^ト。十数^ハ是^レ能^レ依^ル。法界^ハ是^レ所^レ依^ル。能^レ所^レ合^シ稱^ス。
故^ニ言^フ十^ノ法^ノ界^ト。又^チ此^ノ十^ノ法^ノ。各^々因^テ各^々果^ト。不^レ相^レ混^シ濫^ス。故^ニ言^フ十^ノ法^ノ界^ト。又
此^ノ十^ノ法^ノ一^ノ当^テ体^ト。皆^ニ是^レ法^ノ界^ト。故^ニ言^フ十^ノ法^ノ界^ト云^フ。」
- (25) 右同書、五三頁c～五四頁a。
- (26) 右同書、五四頁a。
- (27) ジャック・ラカン(一九〇一～一九八二)は、自らフロイト派と称する
フランスの精神分析家である。
- (28) Jacques Lacan, "Écrits," (Seuil, 1966), "Le stade du miroir comme forma-
teur de la fonction du Je telle qu'elle nous est révélée dans l'expérience
psychanalytique," p.93. 『エクリ』(弘文堂、一九八一年)I、一二五頁。
翻訳文は原文に基づいて改訳を試みた。また、拙論「仏教が持つナラティ
ヴの可能性―ラカンの理論を手がかりとして」(『日本仏教心理学会誌』第

号、二〇一二年、一二四～一三五頁）参照。

(29) Ibid. p.94. 右同書、一二六頁。

(30) Jean Laplanche et J.-B. Pontalis, "Vocabulaire de la psychanalyse," Press Universitaires de France, 1967, p.196.

(31) Ibid, "Fonction et champ de la parole et du langage en psychanalyse," p.251. 右同書、三四二頁。

(32) 『ラカン入門』、筑摩書房、二〇一六年（二三～二四頁。実際、ラカンは「寸断された身体 (corps morcelé)」と呼んでいる。(Ibid. p.97. 『エクリ』 I 一二九頁)

(33) 右同書、四五頁。

(34) Ibid, "D'une question préliminaire à tout traitement possible de la psychose," p.565. 『エクリ』 II、三三二頁。母親の存在欠如とは、母親が自分をかまってくれないために行う遊戯のことで、日本の場合でいえば、子供をあやすときの「いないいないばあ」に例えられている。実際は、糸巻まという対象を投げることで引き寄せることのくり返しによって、「いない／いた」という不在／在を操ることという。(本文より略説)

(35) Ibid, "Fonction et champ de la parole et du langage en psychanalyse," p.319. 『エクリ』 I、四三五頁。

(36) Ibid. 右同。

(37) Ibid. 右同。

(38) 『ラカン入門』、四五頁。